

令和7年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第74回会議(化学関連分野)

所属機関・部局・職名： 日本大学・文理学部化学科・助手

氏 名： 西依 隆一

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

生化学や電気化学など多様なバックグラウンドを持つノーベル賞受賞者の講演ということもあり、有機合成化学を専門としている私には、難しい内容もありましたが、ノーベル賞受賞者の講演スライドの最後のメッセージは、若手研究者にインスピレーションを与え、モチベーションを上げるものでした。今回参加されたノーベル賞受賞者の中には、ご高齢の方もいらっしゃいましたが、現役の科学者として研究活動を継続されていたことに驚きました。私自身も、科学に対する好奇心をもって、いつまでも研究したいと感じました。

吉野彰先生

プロモーションビデオを毎年作成しているらしく、講演の最後に拝聴しました。ナレーションは英語で話されていたのですが、最後に日本語でメッセージが流れてきた時は、感動いたしました。本会議で知り合ったデンマーク王国(デンマーク)で電気化学を友人も、同様の感動をしたそうで、似たような思いを共有できたことは貴重な経験でした。

Sir David W. C. MacMillan 先生

私が有機分子触媒の開発に従事していたことから、MacMillan 先生の有機分子触媒に関するご講演を期待していましたが、最近の研究のお話をされていました。私は、日々自身の研究でもがいているのですが、自身の研究を俯瞰して、異分野へ挑戦することの大切さを学びました。また、MacMillan 先生の発表スライドはとても綺麗で、研究内容だけでなく、スライド作成の点でも感銘を受けました。

Ben L. Feringa 先生

ものすごい熱量が伝わり、参加した若手研究者全員に影響を与えた講演だったと感じました。研究内容もさることながら、その伝え方も大事だということを実感しました。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカーション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

すべての休憩時間中で、私が見たノーベル賞受賞者のほとんどの方が、数十人以上の参加者に取り囲まれていたのが、印象的でした。

Sir David W. C. MacMillan 先生

私は講演後の休憩時間中に、話しかけようと取り囲んでいましたが、あまりの数の多さに輪から抜け、その様子を眺めていました。MacMillan 先生は、取り囲む参加者が増え続ける中、初めに立っていた位置から徐々に後退し、壁にまで下がっていても、一人一人丁寧にディスカッションし、たまにユーモアを交えた雑談を行い、サインや写真撮影に笑顔で応じていた姿を今でも私の脳裏に残してくださいました。私は今後も研究を続けていく上で身に付けたい姿勢を見せてもらいました。

Ben L. Feringa 先生

Ben 先生については、講演以外でも熱を持ったトークや人として尊敬できる誠実さに魅了されていました。しかし、Ben 先生がご担当の Open Exchange を終えた後の BBQ の時間に、JSPS 関連で仲良くなった日本人の友人が声を掛けたところ「電話する」と言われたきり、話しかけられなかったという話を聞き、講演やイベント時などの様子から、会議中、いつでもどこでも同じように対応してくれるものだと思い込んでしまっていて、一人の人間に対する気遣いや思いやりを忘れてはいけないと感じました(日本人特有の感性かもしれません)。また、タイミングが大事ということを痛感いたしました。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

日本に興味を持てくださる参加者が非常に多いことを感じました。恐らく一人の人として、日本の伝統文化やサブカルチャーに抱かれている興味を、科学者間では、日本で行われている、または日本人が行なっている研究に対しても、それらと同程度以上に抱いてもらえるように、まずは自分からそのような研究を行っていきたいと感じました。

反対に私が諸外国の参加者の背景となる知識が乏しいことに気付かされました。地名や気候、食生活、文化・政治・経済など、深い話ができるほど、詳しく知らないことが分かりました。一方で、中華連邦共和国(中国)への渡航経験や個人的興味から、デンマークに移住した中国人と、友達になれました(英語でのコミュニケーションはあまりできなかったため、インターネット上の通訳機能を用いてコミュニケーションをとりました)。たくさんの人と知り合って、深い話ができないまま、知り合い程度に留まるよりは、たとえ一人だとしても、会議が終わった後も交流ができる機会を作るのが、自分のスタイルに合っていると感じることができました。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

会議が始まる前、ノーベル賞受賞者の名前、呼び方、ノーベル賞の対象となった研究などをまとめて共有してくださった日本からの参加者がいて、心を動かされました。私は、日々の業務に忙殺されて、そのような取り組みをしていなかったのですが、そのかたのお話を後に聞くと、私と似た境遇で、視点の高さをひしひしと感じました。

私が参加した回は、日本からの参加者をまとめて繋げてくださった方がいらっしゃり、会議が始まった頃は、まとまって行動していました。お互いのことを知るにつれ、会議中は次第に複数のグループに分かれて行動するようになりましたが、その過程では、自分とは異なる境遇や夢・目標を知り、尊敬できる仲間に恵まれ、自分は運が良かったと感じました。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

Lecture

ノーベル賞受賞者が、ノーベル賞受賞の対象となった研究だけに限らず、様々な題でご講演をされます。このような機会は、リンダウ会議にしかないと思います。前に少し触れましたが、Ben 先生の熱量は、文字だけでは伝えられないものすごいものでした。

Grill & Chill

実際に経験してみると、リンダウ会議のスケジュールは、朝から晩まで非常にタイトなため、時間に余裕を持った予定を立てられない方が、唯一、現地の雰囲気のリラックスして味わえる場だと思いました。比較的暑かったため、湖に入る人もいて、日本にいては知れなかったことを体験できたと思います。

Boat Trip

観光名所でもあるマイナウ島に船に乗って行きました。魅力的な花畑など、人生でもう二度もあるか分からない、非常に貴重な体験をさせてもらいました。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕

研究活動におけるメリットとはいえないかもしれませんが、普段参加する学会では交流することとはなかったであろう、有機合成化学分野で研究する友人を持てたことは、このような会議へ参加したことに依るところが非常に大きいと考えています。今後も、ここでできた交流を大事にしていきたいと思いました。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

ノーベル賞受賞者が、自身の声や熱量等、生の言葉で、若手研究者を励ましてくれたことが印象に残っているため、この経験も糧に、日本で研究を行っていき、名声等を世界に広げていきたいと思いました。また、自分が与えてもらったこの機会を、自分の周りの人が得られるよう、サポートしていきたいと思いました。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

このような会議は他にありません。そして、普段行く学会だけに参加しては、分からない世界があります。視野が広げられ、モチベーションを高められ、終わった後には参加して良かったと思えた回でした。まずは応募してみてください。参加後、どこかで、このような体験を話題に、当時を思い出させるような、似たような経験を共有できるようなお話しができれば嬉しい限りです。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)